

St. Luke's International University Repository

学術活動報告(1996年度)

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2007-12-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10285/325

This work is licensed under a Creative Commons
Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0
International License.



学術活動報告（1996年度）

WHOプライマリーヘルスケア看護開発協力センター

〈今年度の活動〉

1. グローバルネットワーク

1) 第8回 グローバルネットワークミーティングへの参加（3月）

1996年3月4～5日に、中東 Bahrain で行われた第8回WHO Collaborating Center for Nursing and Midwifery グローバルミーティングに、小島センター長と香春助教授を派遣した。Task Force の推進、年次計画等について話し合わせ、当センターは、Cooperative Project と Safe Motherhood Project の推進を担うことになった。

2) Latin America and The Caribbean Regional IEC Workshop on Adolescents' Sexual Health への参加（11月）

1996年11月11日～15日、メキシコ合衆国で行われた思春期の性教育の教材開発に関するワークショップ（日本国際家族計画協会、メキシコ家族計画協会、世界人口基金後援）に参加した。ワークショップは、17ヶ国、80名の参加者があり、当センターから、WHO Collaborating Center Global Network Project “Safe Motherhood” の活動の一翼を担うべく、今後の国際協力活動の方向性を探るため、加納講師、平林講師を派遣した。

3) Cooperative Project 活動（12月）

Annual Report、Task Force Reference をプロジェクトリーダー（英国グラスゴー）に送付した。また、各センターでの活動を活発にしていくために、当センターの目的および活動を表現した下図のような Vignette を作成し、同リードセンターへ送付、PRした。

“Increasingly Important Role of Nurses and Midwives in Improving Client's QOL”



2. 活動報告書(Annual Report)の作成・配布（5月）

当センターの活動報告の6巻目として、1995年4月～1996年3月までの活動報告と研究を5月に作成し、国内関連省庁及び看護大学等59ヶ所、国外関係機関及びWHO センター等39ヶ所に配布した。

3. WHO 協会総会への参加（6月）

今年度より、WHO 憲章精神の普及に努めているWHO 協会に加盟した。今年度の総会は、6月8日、京都にて開かれ、センター長代理として毛利講師が出席した。

4. 国際協力活動

1) Nursing Research and Training Network 会議への参加（10月）

西太平洋地区における看護研究と研究者養成に関するネットワークづくりの方向性を検討する為の会議が、韓国延世大学で開かれ、当センターから羽山教授が参加した。会議では、看護が政策立案にコミットし、国レベルの健康政策活動の計画・評価に参画すること、看護職の研究能力を高めるサポートと体制整備などについて話された。特に、世界各地でもたらされている感染症の被害から、感染予防プロジェクトを5年計画ではじめていくこと、Asian Nursing Research and Training Network を作り、事務局を韓国延世大学におくことが提案されている。

2) International Trends in Elderly Nursing への参加 (12月)

1996年12月6日、韓国へのゲストスピーカーとして「日本における高齢者対策と地域看護活動」について、成木講師が招聘された。

5. 研究活動

准看護婦をめぐる諸外国の看護制度に関する研究 (平成8年度厚生省看護総合対策事業助成)

わが国の准看護婦制度における今後の方向性について政策に反映される資料を得る目的で、40箇所に及ぶWHO コラボレーションセンターを起点に、各国医療機関における多様な職種と協同した看護実践の実際について、ノルウェー、スウェーデン、イギリス、韓国等、50カ国以上の国で、調査を行っている。本研究に際しては、東京大学、国立公衆衛生院、本学から研究協力者を得ている。本研究の結果は、1997年3月29日に発表の予定である。

6. その他

1) 情報活動

(1) 雑誌『助産婦』「WHO から助産婦への手紙」連載継続

(2) Global Network Newsletter への投稿

2) 表敬訪問

1996年11月5日、Dr. Jane Norbeck (UCSF WHO コラボレーションセンター長) の表敬訪問を受けた。

1996年11月27日、Ms. Pat Pettigrew (エジンバラ キーメンリーカレッジ国際保健センター看護講師) および British Council の Mr. Maurice Jenkins の訪問を受けた。

3) 財源確保活動

今年度は、研究費申請を平成8年度分として3件、平成9年度分として1件行なった。このうち平成8年度分の1件が承認され、平成9年度分は申請中となっている。また、今後に向けて、企業からの助成を得る方法を模索している。

(センター長: 小島 操子

委員: 堀内 成子, 及川 郁子, 香春 知永,
成木 弘子, 野村 美香, 久代和加子)

スタッフ教育委員会

スタッフ教育委員会は、スタッフの教育ならびに研究に資する能力の向上を目的に、教育セミナーや研修会、講演会などを企画・実施している。1996年度は、下記のような内容を実施した。

〈教育セミナー〉

日 時：6月4日（火）16：00～17：30

講 師：菊田文夫先生

テーマ：第1回「新校舎情報システムの紹介」

目 的：新校舎における情報システムについての情報を得る。

日 時：6月25日（火）16：00～17：30

講 師：菊田文夫先生

テーマ：第2回「新校舎情報システムの紹介」

目 的：新校舎における情報システムに関するさらに詳細な内容についての情報を得、質疑応答をする。

〈スタッフ研修会〉

冬季スタッフ研修会

日 時：12月20日（金）9：45～15：30

内 容：研究・教育活動報告

菱沼 典子先生：「看護技術研究に関する話題提供」

平林 優子先生：「小児科外来の看護に関する一連の調査、研究の報告」

鈴木 久美・伊藤恵美子・南川 雅子先生：「がん告知を受けた患者の主体的ながんとの共生を支える援助プログラムの開発に関する研究」

平林 優子・加納 尚美先生：「メキシコ思春期保護ワークショップにリソースパーソンとして参加して」

助川 尚子先生：「大綱化による大学外国語（主として英語）教育の改革と本学の場合」

水口 公信先生：「癌患者の心理」

* 尚、本年度夏季スタッフ研修会は、大学引っ越しのために中止した。

〈新採用者オリエンテーション〉

平成9年度新採用者のオリエンテーションの企画・準備

（スタッフ教育委員会 委員長 太田喜久子）

第29回公開講座 A

今年度、第29回公開講座は、「ケースマネジメントークライアント主体のケア提供システムを考えるー」というテーマで、1月11、12日に開催した。講師は、アリゾナ州ツーソン市のキャロンドレット・ヘルス・ネットワークのジェリ・ラム氏、および本学客員教授のトニー・ハリントン氏である。また、パネルには、板橋区保健婦の青山幹子氏、白十字老人訪問看護ステーションの秋山正子氏、セコム株式会社の山田雅子氏の3名をおよびした。

公的介護保険制度の検討がいよいよ具体化し、ケアマネジメントの論議が様々ある中でのタイムリーな開催であった。また、日本看護協会でもケアマネジメント認定看護師の講習会を始めたところであり、臨床・地域の分野を問わず、参加者から多様な関心が寄せられた。アメリカ合衆国の実状は、日本の保健医療制度とは大きく異なるところがあるため、分かりにくい点も若干あったが、看護職がおこなうケースマネジメントの実際は、今後の日本での活動にとって示唆に富んだものであった。ハリントン氏の話は、マネジド・ケアへと移行した歴史をふまえて、主として医療・看護サービスの質とコストに関連しており、医療に関わる専門職が経済的な視点を持つことの重要性を指摘していた。また、ラム氏は、さすがに実践家の本領を発揮されて、ケースマネジメントが個別ケースへのサービスから地域におけるシステムとして発展していくプロセスを具体的に話されていた。

新校舎における初めての公開講座開催であったが、教員・学生および事務職が一体となって、アットホームな雰囲気のうちに会が進められた。また、東和エンジニアリングからは専門スタッフが前日から詰めて機械の調整に当たってくれていた。おかげで、301教室と講堂との同時会議も、初の試みであったが成功した。あとは、最新設備をつかいこなすこちら側の慣れの問題と、それをどのように使うと効果的であるかを考えることである。

校舎で開催するにあたり、当初はいろいろな心配もあったが、終わってみるとそれらが杞憂であったことがわかり、委員一同、胸をなで下ろしているところである。

(公開講座A委員会 委員長：羽山由美子

委員：野地 有子，トニー・ハリントン，加納 尚美，平林 優子，
鈴木 久美，横山 美樹，有森 直子，片平 好重)

第19回公開講座 B

「私の現在の生活の仕方、生き方」

毎年1回開催し、地域の方々と共に企画運営している地域公開講座の今回のテーマは、日野原重明学長による「私の現在の生活の仕方、生き方」で、平成8年3月11日午後6時30分より、聖路加看護大学アートルームで行われた。参加者は160名にものぼり、性別では男性47%、女性53%、年齢では20歳代から80歳代と幅広く、最も多いのは50歳代29%、次いで60歳代28%であった。講演内容は、日野原学長の幼少期から学生時代、聖路加国際病院における医師としての活動および聖路加看護大学での教育、またアメリカへの留学時代など、それぞれの時代の生活と生き方について貴重な写真やスライドにて示されながら話された。参加者からは、日野原学長の体験されてきた人生のいろいろな段階や節目における先生らしい生活の仕方、生き方、生活習慣に触れることができおおいに参考となり、また時代の歴史や聖路加の歴史とも重なり、多くの示唆を得ることができたとの声が多かった。講演後のアンケートでは、ほとんどの方が「大変よかった」とお応えになり、感想では、「感謝の気持ちでいっぱい」、「健康は自分でつくるものであるということを感じた」、「ボランティア、ストレスなど自分の思っていた意味との相違があることを知った」、「病院と大学と地域が一体となっている様子がうかがえた」、「新校舎での新たな講座に期待している」等々であった。「さようならアートルーム、お世話になりました」との感想もあり、歴史ある旧校舎における最後の地域公開講座にふさわしい会となった。

(公開講座B 委員長：野地 有子

委員：栗生田友子，結城美智子)

海外の研究者との活動

Dr. William L. Holzemer の招聘について

1996年度も、幸いなことに私学振興財団の一部補助を得て、ホルツマー先生が本学に来校された（11月29日～12月19日）。カリフォルニア大学（UCSF）でのご本務も大変なご多忙で、今回は例年より3～4日、滞在が短い。例年どおり新宿プリンスホテルへの投宿、研究室は5階奥の20研でハリントン先生のお隣。旧校舎の丸テーブルの部屋はすき間風が寒かったが、新校舎はとても快適とのこと。何よりも図書館が素晴らしいとお褒めをいただき、米国でも貴重な1930～50年代の古い雑誌や教科書に目を見張られていた。

クラス・スケジュールは、修士1年のクラスが6回、博士が9回、学部3年生も1回入れて、それぞれのレベルに合わせた研究法の講義である。今年は、博士の学生のクラスを火曜日にも入れたため、通訳なしで、博士の学生は午前・午後のクラスが終わると、想像力を使いきって、“headach”をしきりに訴えている。来年からは、全く通訳がなくなるが、大丈夫だろうか。

来校されて1週めに、先生のお知り合いのDr. June Lunney（NIH, National Institute of Nursing Research 看護専門官）が台湾行きの途中に東京に寄られ、本学にも訪問された。助成金制度の違いや、審査のシステムの違い、最近の看護研究の動向など、昼食をはさんでいろいろな情報をお聞きすることができた。

（研究法担当：羽山由美子）

I C M（International Confederation of Midwives）国際学会への参加について

1996年5月にノルウェーのオスロで開催された、第24回I C M（International Confederation of Midwives）国際学会では、The Art and Science of Midwifery gives Birth to a Better Futureをテーマに、「リプロダクションと子どもの健康」「出産の実践と助産における文化的相違」「出産の心理学的側面」「出産の生理学的側面」「助産の教育、研究とリーダーシップ」についてのワークショップが行われた。助産の教育・研究では、伝統的な助産といわゆる科学的とされる助産との狭間での各国のゆらぎの現状の中で、よりよい助産および助産を行う者の責務について活発に意見が交換された。特に、出産する女性と助産を行う者が互いに自分自身の力を発揮していくため、および助産を行う者自身がその社会において力を発揮していくためのエンパワーメント（empowerment）と、それを支える教育・研究の重要性が強調された。

本校からは演題として、「日本の助産婦のネットワークについて」「世界の助産教育について」「分娩期のケアの質の評価について」「分娩中の身体知覚とコントロール感との関係について」そして「会陰切開と裂傷の違いによる産褥期の生活への影響の比較について」を発表し、活発な意見を交換した。また、毛利が国内外の助産婦とネットワークを組み活動しているJIMON（Japan Independent Midwives Organized Network）がブースを開設し反響を得た。他の国々の助産を行う者との交流は、自国の現状を捉え直すばかりでなく、大きなエネルギーを得て元気に満ち満ちる意味で大切な機会であることを実感した。

（母性看護学・助産学担当：堀内成子、森明子、加納尚美、三橋恭子、毛利多恵子、有森直子、佐藤直美）

『9th International Conference On Cancer Nursing』に参加して

1996年8月12日～15日、英国の歴史的に有名な海辺のリゾート地 Brighton において『9th International Conference On Cancer Nursing』が開催され参加した。隔年に開催される本学会は、今年で9回目を迎え、世界のさまざまな地域から選ばれた150を越える口演と200を越える示説の発表があり、とても盛会であった。少ないアジアからの発表の中で、小島先生が「Japanese Society Of Cancer Nursing : its history and perspective」と題して日本におけるがん看護の歩みと今後の展望について発表された。また、小松先生は「Adaptive coping mechanisms in diagnosed cancer patient with cancer」、鈴木先生は「The current explanation about cancer to patients in Japan」と題して平成6年度文部省科学研究の成果を示説で発表された。また、文化的・社会的な違いを越えて、さまざまな国の人々と交流するよい機会をもつことができた。

今回のテーマは「Cancer nursing — creating the future」であったが、テーマどおり21世紀に向けて、がん看護を考えていくうえで多くの示唆を受けたことは、私にとってとても貴重な経験となった。

(成人・老人看護学 岡光 京子)

1996年度マギル大学夏期語学研修報告

1994年の夏に始められたマギル大学夏期語学研修(1995年度紀要参照)は本年から従来の4週間のプログラム(7月28日～8月26日)に加えて、本学のカリキュラム改正に伴う日程調整の希望に応じて3週間のプログラム(8月2日～8月26日)も開かれ、4週間のプログラムに5名(編20回生1名、3年生4名)、3週間のプログラムに16名(2年生10名、編21回生6名)が参加した。

プログラム全体のスケジュールに関しては、1994年度と大きな変化は見られない。英語の授業については、第1回目には看護に関する英語に重点を置いたが、学生の満足度の低さとマギル大学の英語プログラム副主任の Myles 教授からの一般英語に重点を置くべきとのアドバイスの従い、第2回目1995年度(8名参加)から授業内容を一般英語中心に移行すべく検討、依頼した。

この結果、今年度はスキル面では過去2年より成果があがっている。1994年におこなったものと同じテスト(TOEFL Model Examination: Model Test One Sec. 1 : Listening Comprehension)によって学生の listening の力を測ったところ、94年は研修後と研修前の差が11.9点、96年は12.6点であった。学生の自己評価による研修前と後の「英語力の変化」は listening, speaking, writing, reading については94年と96年の評価値は殆ど変わらないが、「英語を話す、聞く自信の増加」は69%から96年度は79%と増加している。

今年度は大学の施設、食事に対する評価が大変低くなったため、全体としての満足度は94年に比べ低くなっているが、英語力の向上、語学プログラム、モニターに対する評価は94年度同様に高い。

また、当研修期間中、カナダ人以外にも、大学寮に同宿中の韓国人はじめ、他の色々な国の人と接する機会をもち、文化、生活、国民性の違いを身近に体験することを通して異文化理解、他者理解を多少なりとも深めたことは国内では得られない収穫であった。

なお、このプログラムは1996年度より英語の2単位認定科目となった。マギル大学側としては評価の基準を通常の大学の評価基準でおこなった。また、本学では研修後にも writing において課題を課し、個別指導により研修のまとめをおこなっている。

(英語担当 : 助川尚子)